S12-2

交通事故により遷延性意識障害となった患者家族の悲嘆過程

木沢記念病院　中部療護センター
○石山　光枝

【目的】突然の事故により頭部外傷を受け重篤な状態になり、遷延性意識障害となった患者家族の悲嘆の実態や受容過程を分析し、医療従事者としての関わりのあり方を明らかにする。【方法】センター入院中の遷延性意識障害患者4事例の家族に半構成的質問用紙を用い面接聞き取りを行った。事例1は21歳、事故後3年2ヶ月。事例2は31歳、事故後2年7ヶ月。事例3は18歳、事故後2年2ヶ月経過。事例4は20歳にて事故後1年6ヶ月経過。聞き取りをした家族はすべて母親であった。【結果】事故直後には突然のことで「信じられない」「このような状態になるとは思っていなかった」と述べた。遷延性意識障害となった状態が固定しても「少しずつ良くなる」という希望を持っているが「悲しみはずっと続いている」と述べられた。また、家族の絆はいっそう深まっていた。しかし急性期を脱したときに転院先を探すことやその時々で医療従事者から適切なアドバイスがなく困惑したことが語られた。【考察】悲嘆過程の分析においては終末期患者を持つ家族の悲嘆や死別による悲嘆過程を分析した研究はあるが、今回のように遷延性意識障害患者の家族の分析はなかった。悲嘆の感情の中では早期にはショック・否認・混乱は同様に語られたがあきらめの感情はなく、患者の微々たる回復を新しい目標としていた。事故後早期では医療従事者やソーシャルワーカーの働きかけ、特に精神的な支援が乏しいことが明らかになった。突然の事故により家族は悲嘆と同時に現実を受容し何らかの望みを持つことでその悲嘆を回避しようとしている。その過程で医療従事者は患者同様に家族へも細かい配慮や支援が必要であると考える。